



監修：
ICT CONNECT 21

生徒のタブレット端末の活用

永野 直

千葉県立袖ヶ浦高等学校情報コミュニケーション科主任

① ICTと21世紀にふさわしい学び

千葉県立袖ヶ浦高等学校情報コミュニケーション科では生徒が自己所有のタブレット端末 (iPad) を、授業をはじめ部活動、学校行事、家庭学習等さまざまな用途で活用している。そのスタートは2011年であり、文部科学省が「教育の情報化ビジョン」において、『情報通信技術を活用して子どもたち一人一人の能力や特性に応じた学び、協働的な学びを推進』し、21世紀にふさわしい学びの環境と学びの姿を示した年と一致している。それまで教科のICT活用というと、教材提示を中心とし

た「わかる授業のための教員によるコンピュータ活用」という趣旨だった。それも小中学校での実践が中心であり、高校では「受験指導で手いっぱいでありICT活用などしている暇はない」という風潮も少なからずあった。

いずれにしても、普通教室でのICT活用は日常的なものとはいえず、何か「特別な」授業であったことは間違いなし、機器の不足、準備に時間がかかる、操作や活用研修の時間が取れない、などの要因から一部を除いて普及・利用がなかなか進まなかった。しかし2010年頃からのタブレット端末の登場によって、ICT活用の状況は大きな変化を見せはじめ、パソコン教室からあらゆる教室へ、そして教員から生徒へと、利用主体や用途の幅が広がりを見せてきたのである。

② タブレット端末の一人一台環境

2011年より新設された情報コミュニケーション科では、生徒各自が各家負担による私物タブレット端末を持ち込み、いわゆるBYOD (Bring Your Own Device) 方式によって授業や部活動をはじめあらゆる学習活動で利用している。当時公立高校での生徒のタブレット端末必携は全国初の試みであった。先行事例もなく教員の戸惑い、近隣中学校、保護者への説明など多くの課題もあったが、7年が経過した現在では学校内外にその趣旨や利用目的が周知されてきている。

日々のタブレット端末の用途は多岐にわたる。写真やビデオ